

新・登録資料をご紹介します

強制空冷管 (7F 25B)

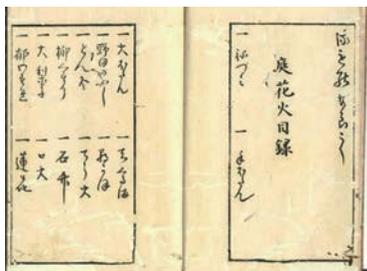
寄贈：中村 聡氏



真空管は1970年代はじめ頃まで使われていた電子部品ですが、トランジスタが普及してもなお、高電圧や大出力が必要などころでは使い続けられました。この真空管は、和泉市にあった大阪航空局信太航空路監視用レーダー事務所でビーコン（誘導電波）を出すために使われていた送信管です。大出力の真空管で、冷やすためにガラス製のフードを被せ、風を送りながら使用しました。

大倉 宏(学芸員)

「庭花火」(古書)



江戸時代頃に書かれた、花火に関する本で、材料や作り方などが書かれています。庭花火(にわはなび)とは、手で持って遊ぶ花火のことを言います。この本では、24種類の手に持って遊ぶ花火のほかに、“上げ物の部”として11種類の花火が紹介されています。それぞれの花火のイラストが毛筆で描かれ、焰硝(えんしょう；硝酸カリウムのこと)、灰(炭の粉)、硫黄や鉄など、材料とその分量も書かれています。 岳川 有紀子(学芸員)

オープンリールテープ

寄贈：藤原 徹也氏



1950~60年代頃に、家庭用録音機で録音するために使用されていたテープです。リールがむき出しになっていることから、オープンリールテープと呼ばれます。幅6mmで長さが数百mもある薄いテープに、酸化鉄等の磁性体を塗布してあります。このテープを磁化することで、音声信号を記録することができました。1970年代以降、取り扱いが便利なカセットテープが使われるようになりますが、信号の記録は同じ原理を使っています。 江越 航(学芸員)